

日常生活における言語使用を学習目標設定につなげる リフレクション支援ツール「REFLECTION-BOT」の形成的評価

Formative Evaluation of Reflection Support Tool "REFLECTION-BOT" that Connects Language Experience in Everyday Life to Learning Goal Setting

甲斐 晶子^{*1}, 松葉 龍一^{*1}, 合田 美子^{*1}, 和田 卓人^{*2}, 鈴木 克明^{*1}
Akiko KAI^{*1}, Ryuichi MATSUBA^{*1}, Yoshiko GODA^{*1}, Takuto WADA^{*2}, Katsuaki SUZUKI^{*1}

^{*1}熊本大学教授システム学研究センター

^{*2}タワーズ・クエスト

^{*1}Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

^{*2}Towers Quest Inc.

Email: akiko_kai@kumadai.jp

あらまし：日常生活における言語使用についてのリフレクションを促すための対話型入力ツール「REFLECTION-BOT」を設計・実装した。留学生による形成的評価を行った結果、本ツールを使い日常の言語使用体験を記述し、週次で教員との振り返り活動を行うことで、1) 普段耳にする日本語により意識が向き、2) それぞれの日本語の使用経験をより詳しく覚えていられ、3) 日本語学習についての振り返り活動でより具体的な学習目標を立てられる可能性が示唆された。

キーワード：日本語教育、リフレクション、言語接触場面、自己主導学習、言語学習アドバイジング

1. はじめに

日本で学ぶ留学生にとっては日常生活の全てが日本語学習の機会である。日頃の日本語使用を振り返り、別の場面で応用できるよう意識づけをするかどうかで学習成果は大きく変わる。そのために、例えば教員が留学生と振り返りの時間をもち、日本語使用について振り返りを行うといった支援が検討できる。その週に使った日本語使用経験について振り返り、その成功または失敗の要因を探り、どうすれば次は成功するかを考え共有することで、より詳細な学習目標の設定につなげられると期待できる。

筆者らは留学生にとって身近なコミュニケーションアプリを用い、毎日の日本語使用の記録をするための「REFLECTION-BOT」を設計・実装した⁽¹⁾⁽²⁾。

「REFLECTION-BOT」は日本で学ぶ留学生に広く用いられているコミュニケーションアプリ・LINE 上で動作する対話型入力ツールである。LINE Messaging API⁽³⁾ が持つ、登録したユーザーに対して1対1のメッセージ (LINE では「トーク」と呼ばれている) を配信する機能を用いて設問を送信することで疑似的な対話セッションを行い、入力内容を記録する仕様である。対話セッションはユーザーである留学生が「あのね」と入力することで開始できるが、記録忘れを防ぐための「デイリー自動通知」としてユーザーが予め設定した時刻に自動で通知を送る機能、また管理者である教員が任意のタイミングで通知する「管理者一斉通知」機能を有する。

「REFLECTION-BOT」は以下の設問を送信する。

1. どんな日本語を使ったの？ (使えなかったことでもいいよ)
2. どんなとき、どんな場面・状況だったの？
3. どうしてそれを強く覚えているのかな？
4. その日本語を使ったとき、どんな結果になった？
5. それはいいこと？悪いこと？どんな気持ちになった？
6. 次はどうしたらもっとうまくいくと思う？

本発表では「REFLECTION-BOT」と教員との対面セッションを組み合わせた自己主導学習支援について、形成的評価を実施した結果の一部を報告する。

2. 評価

留学生がある初年次日本語科目で担当教員から本ツールを用いて言語使用体験を記録しておくよう指示され、週次で「週次振り返りシート (印象に残った日本語使用場面についての報告と次にその場面に遭遇したときのための日本語学習目標を書くもの)」を書いたうえでその教員と対面の振り返りセッションを持つという学習支援場面を想定し、形成的評価を行った。評価の目的は本ツールを使用し日本語使用について入力することが日本語学習への意識や週次の振り返りにどのような影響を及ぼすか、一連の学習支援を通してより具体的な学習目標が設定できるようになるかを調べることであった。

2.1 対象と方法

本ツールは開発直後の効果測定段階にあるため、実際の授業では使用を強制せず、独立した学習支援として募集し評価を依頼した。評価者は国内のA大学に通う留学生1名 (日本語能力試験N2レベル合格) である。総合的な日本語運用能力をつけることを目的とした初年次日本語科目を履修している。

評価者にはまず評価実験について説明し協力同意を得た後、リフレクションと学習目標について約5分の簡単な説明を行ったうえで、週次振り返りシートに記入を依頼した。また、本ツールの使用法を説明しデイリー自動通知の時刻設定と送信練習を行った後に、毎日最低一回の日本語使用記録を一週間続けるよう依頼した。そして一週間後、再度、週次振り返りシートに本ツールの記録を参照しながら記入するよう依頼した。それから、日本語教員が記入された週次振り返りシートを見ながら対面セッション

を行った。その後、評価者に対し半構造化インタビューを実施した。なお、インタビューの回答について、鍵括弧内は日本語に不適切さが散見されるが、協力者が述べた内容を原文のまま掲載している。

2.2 結果と考察

1) 日本語学習への意識

7日間で、評価者は6回の記入を行った。質問1については、すべて語単位のことば（ピカイチ、すっぱかす、憂鬱、ベテラン、こんにやく、泥鰌）が挙げられていた。記録できなかった1日については、通知を受けた際、忙しくて記入できずそのまま忘れたと述べた。

毎日の記録への動機および満足度についての5段階評価（5が非常にそう思う、1が全くそう思わない）では評価開始時の「面白そうだ」に対し3、「必要そうだ」に対し2、「できそうだ」に対し4という評価であり、事後の「やってよかったか」については4と答えた。当初は難しい課題ではないが興味や必要性も大して感じないという印象であったが、一週間の使用を通して本活動に価値を見出したようだ。

インタビューからは、本ツールの使用について、何か報告しなければと思うと新しいことばに注意が向く、本ツールに入力することで新しいことばがより覚えられる、週次の振り返りが書きやすくなった、記録を見ることでそのときの状況がはっきりと思い出せたと肯定的に評価した。また、一週間で記入した内容の一覧を見せたところ、思ったより量があった、満足だと回答した。また、教員に見られることを意識するので、記録を適当には書かず、文法の正確性を自己チェックしてから投稿したことから、統語面の能力向上にもつながると述べた。

一方で、設問への答えにくさについては指摘があった。今回の評価者は普段日本語を話す機会が毎日一時間程度あったものの、話す際は自分が知っていることばを使うため失敗や喜び等印象に残るものが少なかったとして、初めて見聞きしたことばについての記録が多くなったという。そのため設問2, 4, 5は特に答えにくさを感じたようだ。評価者からはまず話したことかどうかを聞き、その後の質問を分岐させる等の改善策の提案があったが、提案通り改善するか、あえて答えにくさを残すことでユーザーの日本語使用を促すかについては更に検討したい。

2) 週次の振り返り

事前と事後の週次振り返りシートの記入内容（報告と目標）を比較した。記入内容をツール使用の事前事後で比較すると、事前は一人称の使い方について会話するときの漠然とした悩みが挙げられており、事後は覚えたことば「すっぱかす」を覚えた場面と、次に実際に使えたときの喜びが報告されていた。より個別の具体的な経験が記述されるようになったと言えよう。日本語学習に関する目標は、事前では「スムーズに文章を読むこと」「発音が日本人らしくように勉強すること」「N1（日本語能力試験の最高レベル）

に合格すること」などの抽象的な目標だったものが、事後では「よく使える単語をもっと覚える」「冷静に人の前で話せるように」「当時に言えるように」など、より日本語を「使う」ことに意識が向くようになったことが伺える記述があった。評価者からも日本語を使った記録を書く必要があるため、普段から日本語使用を意識しながら過ごしたと述べていた。

また、インタビューでは週次で教員との振り返りセッションを持つことに「すごいいいと思います」「日本語の会話能力が上がると思います」「日本語をより多く使うようになる」と強調し「普通の授業よりもいい」と答えた。評価者は一週間の単語を書いて、次の週に教員と話すという具体的な学習方法を考え、その方が強く覚えられると回答した。

本評価で体験した、本ツールと週次の対面セッションについて、「これを一週間ではなく一学期間、授業でやれと言われたら、どう思いますか」という質問には、本ツールの入力に慣れれば2、3分で終わるので負担は少なく、通知が毎日くるのも構わないが、宿題とされると忘れた場合に罪悪感が残る点で少し抵抗があると答えた。毎日ではなく、一週間で4日程度答えればよいという設定で課されるのが望ましいと答えた。宿題にされなければ自分はおそらく取り組まず、それは勉強にならないため、適度に強制されたいという意見であった。これらの結果から、評価者は今回の活動に価値を感じたと述べる。

3. まとめ

今回の形成的評価からは、本ツールを使用することで評価者は1) 普段耳にする日本語により意識が向き、2) それぞれの日本語の使用経験をより詳しく覚えていられ、3) より使うことに焦点をあてた具体的な学習目標を立てられ、本ツールが振り返り活動の質向上に寄与する可能性が示唆された。今回は一名分の報告に留まるが、現在、人数を増やし形成的評価を行っている。引き続き詳細な分析を行い、本ツールの有用性について検証したい。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 16K21342 の助成を受けた。

参考文献

- (1) 甲斐晶子, 根本淳子, 松葉龍一, 合田美子, 和田卓人, 鈴木克明: “LINE BOT API を用いた留学生のための対話型 e ポートフォリオ・モジュールの設計”, 教育システム情報学会(JSiSE)2016 年度第 2 回研究会研究報告, pp.69-74 (2016)
- (2) 甲斐晶子, 松葉龍一, 合田美子, 和田卓人, 鈴木克明: “言語使用に関する省察促進を目的とした対話型入力ツールの設計と実装”, CASTEL/J (日本語教育支援システム研究会) 2019 年度国際大会予稿集, (印刷中)
- (3) LINE Corporation, LINE Developers - Messaging API reference, <https://developers.line.biz/en/reference/messaging-api/> (最終閲覧日 2019 年 6 月 1 日)